

京都大学	博士（文学）	氏名	足立 恵理子
論文題目	柳宗悦 日常と神秘 ―美しさの経験にみる肯定性		
（論文内容の要旨） 本論文では、民藝運動で一般によく知られる柳宗悦（1889-1961）について、民藝の後景ともいえる哲学的背景についてとりあげる。柳については広範な研究があるが、本論文は哲学・美学という側面に焦点を絞る。特に柳の宗教哲学的言説を通して柳自身の内面の探究の過程を明らかにするものである。こうした探究のための視座として、本論文では新プラトン主義という視点から柳を俯瞰することを目指す。とはいえ、新プラトン主義という主題自体も広範なものであるため、本論文では特にプロティノスをひとつの視座として考察をすすめる。 以上のような哲学という側面から柳を研究することの背景には、これまでの柳に関する研究の動向が関わっている。いわゆる「民藝」が先行研究の主題の中心を占め、民藝運動前後の時期にとりくまれた柳の思想的な営みは十分に取り上げられてこなかったという点である。特に、西洋哲学史という観点からのアプローチについては十分に補う余地がある。民藝理論を除いた柳の思想的な営みと民藝運動とが乖離して捕らえられる傾向が生じるのも、こうした研究基盤の不足がひとつの原因であるともいえるだろう。本論文ではこの間隙を埋めるひとつの試みともなる。そのために、本論文で追求されるのは、民藝の背後にあった柳の抱える形而上学的な問いである。柳の問いはいわゆる「実在」に向けられており、プロティノスの一者に由来する「一」だけでなく「無」、「空」、「神」、「中」、「理法」、「自然」などさまざまな言葉で語られる生きることに関わる“根源的な価値”に対する問いである。ここには、柳の生い立ちも関わっており、幼少時に父親を亡くしたことも関わっていると推測されている。この生における根源的な価値は、美しさをめぐる思索を通じて追求され、言葉や論理といった「分別」ではなく美しさの経験によって、根源的な価値そのものを「感じる」ことが追求される。 本論文では、以上の詳細を議論すべく、三部に分けて本文が展開される。第一部はプロティノスを手掛かりとして柳の宗教哲学を内面への探求として位置付ける試みとなっている。そこでは、柳が実際に蔵書として所持していたプロティノスおよび新プラトン主義に関する文献の調査を踏まえ、柳が「実在」や「一」などの根源的価値についてどのような思索を展開し、内奥へと迫ったか、柳の宗教哲学的問いの内実が明らかとなる。第二部では、第一部において探求された内奥としての根源的価値の問いが、「自然」という概念のうちで再構成される過程をたどる。そこでは、概念などの抽象的な領域を指す「こと」と、具体的な対象や事物を示す「も			

の」とが循環しつつ、美しさが生成される場としての「自然」が浮かび上がってくる。第三部では、第二部で探求された「自然」の循環的なあり方が、柳の思想において内面化されている点を明らかにする。第二部では「自然」において循環していた「こと」と「もの」とが、「心」においてめぐるものとしてここでは描写される。

まず第一章では、柳宗悦によるプロティノスへの接点として蔵書調査に基づいて辿る。第一節では、2022年の秋に日本民藝館で実施した資料調査に基づいて、プロティノスに関する柳の蔵書一覧を示す（英訳全集および研究書）。そして、柳が参照したプロティノスの全集および研究書等から、柳のプロティノス理解の性格づけを行う。つまり、それらの研究書によるプロティノス解釈が柳へと与えた影響等を踏まえ考察する。第二節では、蔵書の中から柳による書き込み箇所（主には下線部）を取り上げ、柳のプロティノス理解の詳細を辿る。柳は「善あるいは一者について」（VI.9）に多く下線を引いており、宗教的な境地としての「一」へと関心が強かったことが分かる。第三節では、第二節での下線部の引かれていた箇所の検討を踏まえ、柳自身のテキストを検討し、プロティノスの柳への影響関係を明らかにする。

第二章では、前章での内容に基づき、初期から晩年にわたる柳思想におけるプロティノスの思想の影響を引き続き探る。本章では、両者のテキスト比較に基づいて考察が進められる。第一節では、ウィリアム・ブレイクを中心とした神秘思想への関心から、プロティノスら新プラトン主義の思想の受容へと至る時期を中心とする。第二節では、民藝運動開始以降の柳の思想を中心に引き上げ、民藝という「もの」の美へと注目する過程で、そうした「もの」と柳自身の思想とのすり合わせに注目する。本節では、柳が「もの」理論を適用する際に用いる論理構造を柳のプロティノス受容から読み解く。第三節では、後期にあたる「仏教美学」を構想する時期のテキストを中心に扱う。そこでは、「もの」から再び理論へと関心を戻した柳による美についての思想を引き上げ、プロティノスとの比較を通じて考察する。

第三章では、柳の神秘主義への傾倒が、後年の柳の民藝論および「仏教美学」において、いかにして引き継がれているか、その理論的な連関を検討する。第一節では、柳の「一」概念の背後にプロティノスの思想の受容があったことを見届ける。そして、民藝以前の柳の思想における「一」と美の結びつきを明らかにする。第二節では、前節での議論を踏まえ、民藝論における「一」概念の展開を追う。そこでは、物を対象として生じる「見ること」と「作ること」の理解に「一」概念がどのように反映されているかを辿る。第三節では、原典に則したプロティノスの比較を通じて、「見方」や心の在り方と美とが結びつく柳独自の「一」論とでも言うべきものがどのように形成されたのかを明らかにする。以上の考察から、最終的に導き

出される「一」論を柳における神秘主義と美との連関の論理として、柳の美学を再構成する。これまで実践家としての側面を正当に評価しようとするあまり、理論家としての側面は十分に顧みられてこなかった柳であるが、本章はその点を補うものでもある。

第二部では、前部でのプロティノスという視座に対する検討を引き継ぎつつも、プロティノスに柳が読み取っていた心の内奥ともいべき「一」の理解から離れ、民藝という「もの」との出会いを通して生じた変化を、「自然」という言葉に対する柳の理解を追うことで描写する。

第四章は、近代日本美学史におけるプロティノスに対する理解の系譜を辿る。柳がプロティノスおよびその思想に連なる新プラトン主義の思想家について多く言及しているように、同時代の大西克礼（1888-1959）も「浪漫主義」と芸道等にみられる当時の国内での芸術的な実践について、プロティノスをひとつの接点として読み解く試みを展開している。そこではまず、柳がそもそもプロティノスの思想を理解するにあたって、その背景となった可能性のある近代日本における理解の系譜を簡単に辿る。また、時代の近い二人の美学者である柳と大西の先行者として高山樗牛（1871-1902）がいるが、高山と大西克礼が老荘思想を背景にしてプロティノスを解釈している点を取り上げることで、日本近代におけるいわゆる西洋哲学受容の一形式を明らかにする。また、以上を踏まえ、各々の「自然」という言葉への理解をさぐり、特に柳における「自然」の内実を明らかにする。

第五章では、前章で言及した高山樗牛について「自然」という概念を鍵にしつつ、柳との比較思想的検討を加える。柳と高山は美と生活とを積極的に結びつける点が共通しているが、その両者に通底する「自然」概念の参照というもう一つの共通点が本節を通じて明らかとなる。両者が生活の中で重視する美は常に「自然」のあり方を参照したものであり、そのことが美にある種の規範性をもたせていることを論じる。具体的には、「日本の美学的思考」の特徴を高山および柳において再検討するために、美と生活について主題的に論じた両者の思想を取り上げる。特に、「日本の美学的思考」の特徴の一つである美と生活との結びつきの詳細を両者の思想において辿り、もう一つの「日本の美学的思考」の特徴である相対性と絶対性との関係性と、一つ目の特徴との相関関係を示し、両者がいかに結びつくのかを提示する。その際に、高山と柳が「美と生活」について言及する際に用いる「自然」という語を手掛かりに考察することで、この「自然」という言葉が、一つ目の特徴である美と生活、そして二つ目の特徴である相対性と絶対性の両者に対して媒介的な役割を果たすことを示す。

第六章では、柳の美学における「徳」概念に注目する。本章では、これまでの「一」の論理が柳の美の思想、特に民藝品という「もの」を中心とする美の思想においてどのように現れているかを明らかにする。いわば「もの」という個物を介し

た「一」の論理の「多」への現れとなる。第一節では、柳による「民藝学」が一種の規範学として、美術品を中心主題とした従来の美学に対する“新しい美学”として構想された過程を明らかにする。第二節では、柳の構想する美学における美と徳の関わりを明らかにする。その際、前章までに検討された「一」の論理がどのようにして実践的な段階において適用されるのかも明らかにする。第三節では、美的判断をめぐり「もの」・製作者・受容者の各々に「徳」が要求される点を明らかにする。そして、その際にいかにして「一」の論理が三者に共有されるかを考察する。以上から、柳の示す美の「規範」が「もの」・製作者・受容者という民藝論を取り巻く三者それぞれと関わることで、生活のあり方を含めた人のあり方をも規定する内容をもつことが、本章では明らかとなる。また、本章で取り上げるような美と倫理領域との結びつきは、昨今の美学議論の一潮流とも呼応するものである。その理由はひとつには、カントによる「無関心性」の概念を代表とした近代的な美学概念への反省があげられる。あらゆる「関心」(Interesse)から切り離された美は、何にも由来しない自律的な価値として捕らえられ、例えば、Y. Saitoはそのような近代的な美学への批判として、日常の中で行われる人工物に対する道徳的な判断について言及し、とりわけ日常品の美と日々の道徳判断との相互の影響を指摘している。また、同じく現代美学の領域では、徳倫理学に影響を受ける形で徳美学(virtue aesthetics)を考える論者も増え、作品受容や制作の場面での美的判断と道徳的判断(もしくは徳認識論)との関わりが積極的に論じられている。本章では、柳の美学思想がもつ現代的な可能性について、美と徳の観点から検討するための予備的考察がなされる。

第七章では、西田幾多郎(1870-1945)を取り上げる。柳が西田の『善の研究』(1911)に影響を受けていることは、つとに指摘されているが、それは特に1912年の柳の論考「革命の画家」に顕著である。柳は1925年に民藝運動を開始する以前、西洋美術の理解・吸収および日本へのその普及に積極的であった時期に、芸術経験の内実を描写する「革命の画家」(1912)の論考内で、「純粹経験」概念に大きく影響を受けた美的経験の説明を行う。先行研究では、この両者の影響関係については、その事実が端的に指摘されるのみで、西田からの影響は時期的にも限定的なものであるかのような印象を与えている。しかし、民藝の背景ともなる柳の初期の美への言及に及んだ、西田からの影響は一時的なものではなく、その後の柳の思想の展開にも重要なものとなっている。具体的には、主客合一的経験と美的経験との重ね合わせを端的に指摘することができる。それは「主客の合一」という言葉によってあらわされ、これまで言及してきた「一」が主客の一元性、本論文で言えば「もの」と「こと」との往還による心における一元性への志向として見出すことができる。さらに、この点は心と自然との間の往還的な呼応としても導き出される。

第八章は、本論で描写されてきた柳の思想に対する論点の総括とも言える章であ

り、これまでの章の内容に触れつつ、特に「見ること」「作ること」に焦点をあて、前章の「もの」と「こと」との往還性に改めて注目する。第1節では、「見ること」と「美」の関係を取りあげ、「見方」と「もの」との間に生じる相互の働きかけによって、「見る者」自身には一体的なものとして感じられる「美」の生成について論じる。第2節では、同じく「見ること」がもつ「徳」との関わりについて触れ、「もの」を美しく見る「見方」を「徳」として備えることが重要であり、それは経験的に「もの」を見るということからもたらされる点を論じる。第3節では、「知ること」との対比を通して「見ること」の特徴を追求する。「見ること」が一番には重要であるとされながらも、「見ること」の先に「知ること」の段階へと進むことの重要性が述べられており、柳が単に「見ること」のみで美の問題が完結すると考えていたわけではないことが明らかとなる。そして、第4節では「作ること」が主題となり、「作ること」も「見ること」と同様に、「もの」や「徳」と関わり、「心」のあり方とも重ねられながら、「もの」と「こと」との相関から生じるものとして語らえている点を捉える。

以上、全八章から本論は構成される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、柳宗悦の美学を多角的に再検討したものである。柳は、民藝運動の主唱者として知られるが、西田幾多郎の薫陶を受けた哲学者でもあり、特に宗教哲学の分野で多くの論考を残した。しかし、膨大な蓄積のある民藝運動についての研究に比して、その哲学についての研究は必ずしも十分ではなく、ましてや、その西洋哲学受容を実証的・文献学的に明らかにしたものは皆無に近い。この欠を埋める点に、本論文の第一義的な意義が存する。

本論文は、宗教哲学を主題とする第一部（第一～三章）、「自然」概念を軸に同時代の講壇哲学者たちとの関係を切り結ぶ第二部（第四・五章）、そして、内面化された自然において往還する「もの」と「こと」との関係を論じる第三部（第六～八章）に大きく区分される。得られた成果は多いが、特筆すべきものとして、以下の四点を挙げることができる。

第一に、柳の西洋哲学、とりわけ新プラトン主義の代表としてのプロティノスの受容を、柳の蔵書の調査に基づいて実証的に明らかにしたことである（第一章）。著者は、日本民藝館が所蔵する柳の蔵書のうち、プロティノスの著作について悉皆調査を行い、どの著作のどの箇所に書き込みが施されているかを明らかにし、これと公刊著作のテキストとの対応関係を示した。これは、柳について一種の「生成研究」の緒を開いたものと評価できる。あくまで「緒を開いた」段階ではあるが、この方法を量的に他の蔵書にも応用・拡張し、質的に書き込みの前後の文脈を検討していくことにより、柳研究は文献学的により深化していくはずである。そのための重要な一步を、本論文は刻んでいる。

ただし、日本民藝館に残る柳所蔵のプロティノスの著作は、すべて英訳である。このこと自体は、日本の西洋哲学受容・研究の草創期ゆえの制約であるが、著者はそれに飽き足らず、柳が依拠・言及するプロティノスの思想をギリシア語原典にまで遡って確認・再構成し、柳のテキストとの比較に供した（第一・二章）。これが、本論文の第二の成果である。それは、英訳に基づく柳のプロティノス理解を誤解として批判するためではなく、柳自身が理解したよりも深くプロティノスを理解した上で柳の思想を解明するためである。たしかに、本論文ではギリシア語原典の解釈において不十分な箇所もあることが口頭試問においては指摘されたが、それは今後の著者の研鑽によって十分克服されうるものである。むしろ、西洋思想の古典語原典との照合まで踏まえた近代日本思想研究という未踏の領域を切り拓いたことが、評価されるべきである。

第三に、前述の西田をはじめとして、大西克礼や高山樗牛といった同時代の思想家との連関の中に柳の思想を位置づけたことである。本論文が全編にわたって下敷きとする、いわば直接的先行研究とも言える中見真理『柳宗悦：時代と思想』（2003年）は、柳の民藝論を西田哲学のヴァリエーションと位置づけている

が、本論文は民藝論ではなく美の思想を（特に前期）西田哲学のヴァリエーションとして説得的に論じている（第七章）。また、東京帝国大学美学講座教授であった大西と、京都帝国大学美学講座教授が内定していた（結核により取り消しとなった）高山との比較（第四・五章）は、基本的に在野で活動した柳の思想が講壇哲学との緊張関係の中で醸成されていったことを活写しており、これまで注目されることのなかった近代日本思想の一側面に光を当てている。

その高山と柳が交叉するのは、「美的生活」という問題をめぐってである。西洋近代美学の枠組では一見縁遠いように思われる「美」と「生活」とを結びつけて論じることが、二〇世紀初頭の日本の美学の（今日では忘れ去られた）一特徴であったが、「生活」は今日再び世界的に美学の主題として注目を集めている。すなわち、日常のありふれたものにおける感性のはたらきを主題とする「日常美学」や、制作者と受容者双方の「徳」を主題とする「徳美学」であるが、高山と柳の「美的生活」論を歴史的一事象としてのみならず、これらのアクチュアルな視点から再評価している（第五・六章）。これを、本論文の第四の主たる成果として挙げるができる。

このようにして、民藝論の背景を新プラトン主義に代表される神秘主義に探ることから始まった本論文は、日常生活における「もの」への肯定感情を柳の思想の中心に見ることに帰着した。それは、「下手物」を評価する民藝論とスムーズに接合する結論であるが、神秘という非日常的なものと日常という両極を往還するものとして柳の美学を浮かび上がらせたことは、本論文の独創である。今後の柳研究は、この図式への応答という形で進展していくことが期待され、その意味で本論文は、柳研究に画期をなすものと評価できる。

惜しむらくは、各章間の有機的連関が十分に確保されておらず、論文全体の一貫性が見通しにくくなっていることである。副題に採用された「日常」「神秘」「肯定性」というキーワードは、たしかに柳美学を特徴づけるものであるが、論文全体を統べるものとして十分に機能しているとは言いがたい。個々の論述やテクスト解釈にも、やや淡泊で深みに欠けるところが散見される。ただし、前述のギリシア語原典解釈と同様、これらの課題も今後の著者の研鑽によって十分克服可能なものであり、本論文の価値を大きく減じるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2026年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。